



TITLE:

総括と挨拶(<特集>「第1回大学教育改革フォーラム:日本の大学教育をどうするか」の記録)

AUTHOR(S):

岡田, 渥美

CITATION:

岡田, 渥美. 総括と挨拶(<特集>「第1回大学教育改革フォーラム:日本の大学教育をどうするか」の記録). 京都大学高等教育研究 1995, 1: 30-31

ISSUE DATE:

1995-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53458>

RIGHT:

総括と挨拶

岡田 渥美（京都大学高等教育教授システム
開発センター長）

それでは大変時間が切迫しておりますので、最後に私の方で締めくくりをさせていただきたいと存じます。

本日は本当に多数の先生方、すなわち基調講演をして頂きました永井道夫先生をはじめ、問題提起をして下さった天野郁夫先生、梶田勲一先生、そしてコメンテーターとして御発言いただきました大西昭男先生、北垣宗治先生、皇紀夫先生、そしてさらに、来賓として終始積極的に討論にもお加わり下さった文部省の草原審議官、あるいはまたフロアの先生方からも、実に多角的で、内容豊かな、しかも大変インパクトの強いご発言をたくさん頂戴いたしましたことに心から御礼申し上げます。

さて、今それらのご発言内容を網羅的に総括するようなことは、私の力量ではとても叶いませんし、また時間の制約の中で皮相なまとめを試みますよりは、それぞれに賜りましたご教示やご示唆の、一つ一つが持っております重くて深い意味合いを、改めて腰を据えて本当に「反芻」すること——先ほど梶田さんのおっしゃった言い方を借りますと「内的リハーサル」ということになろうかと思いますが——そういう反芻を繰り返すことを通じて、今後の本センターの活動の糧とも指針とも、また励みともさせて頂きたいと存じております。ただ、その「反芻」を致します際の我々の基本的な視座とでも申すべきものについて、若干申し述べますことで「総括」に代えさせて頂きたいと思えます。

最初に触れましたとおり、本センターは他の類似の諸機関とは少々異りまして、より根本的に大学教育そのもののあり方を研究し、大学教育を内側から実質的に改革・改善してゆく、そうした実践的な拠点の一つとして構想されたものでございます。従いまして、巷間よく話題にされますような落語家風のジョークの入れ方とか、あるいは、単純なハウ・ツー的な教授の展開手順についてのマニュアルとか、画一的シラバス作りとか、さらには各種のメディアを使っただけのパッケージされた既存の知識の効率的教え込みとかいったところには、必ずしも重点を置いておりません。むしろ、それらを排除するわけでは決してございませんけれども、そこから先の問題、先のことを実は課題の中心に据えようとしているのであります。換言致しますと、易しいものから難しいものへとか、具体から抽象へといった順序で教えることとか、あるいは授業への動機付けだとか導入の方法だとかいったことを工夫する、要するに初等・中等段階におきます教授法の延長線上で「大学教授法」を考えようとしているのではございません。そうではないと申します際の、私どもの基本認識はこうでございます。

我々が直面している本当に人類史的な二重の危機という“大状況”に対して——先程申しました言葉を再び用いますと、人類全体が今直面している“geo-catastrophe”と“psycho-catastrophe”という二重の危機的な状況に対して——大学ならではの固有のレスポンスの仕方があるのではないかと。そして、そのレスポンスの一つの仕方が、我々が考えておりますところの「大学教授法」の研究開発に他なりません。従ってそれは、大学に固有な本質的活動に即した教授法というものの研究でなければならないと存じます。初等・中等段階での基本的に既成の知識を伝達する教授法の延長線上では決して捉えられないような、その先こそが大学に固有な教授法の研究領域であろうと存じます。「その先」と申しますのは、まさに未知の知にチャレンジし、未知の知を探索し、未知の知を生み出し、発見する——そういう最先端にかかわる本質的にクリエイティブな営みのことであり、これを問題の中核に据えるような教授法の研究開発こそ、我々が真正面のテーマとすべきものであると考えております。

この点から見ますと、先ほど皇教授も指摘されましたが、実は京都大学というところは様々な領域におきまして、まさしく未知の知を発見し発掘する、その最先端の現場でございまして、大学独自の新たな教授法の研究ということにとりまして、実に垂涎的とでも申しましょうか、貴重極まりない材料がぎっしり詰まった、文字通りの「宝庫」であろうと密かに自負いたしております。未知の知にチャレンジする、リスクをかけたクリエイティブな知的営みのプロセスそのものの中から、そこに内在しております人間ならではの形成的、教育的諸契機をいかにして掬いだし、組織立て、体系化して、実践的な理論構築を進めていくか——これが、我々のさしあたっての課題であると受け止め

ております。学内における多種多様な研究活動そのものの中で行われております、個々のクリエイションの具体的事例を全学的に持ち寄りまして、そこでの様々な努力や工夫や知見を組織的に交換し合う場、あるいは、お互いに分析し合い、総合し合って共通の認識を獲得する場、ないし拠点となること。これを、我々は目指そうとしているわけでございます。つまり一言で言いますならば、そのような、それこそ「実践の学」としての教授法の研究開発を心がけているわけでございます。そのための尖兵となる覚悟をしているわけでございます。

実は、先程シンポジウムの冒頭で「内側から」の教育改革ということを強調しました最大の理由も、そこにあるのでございます。顧てみますと、こうした日常の現実の教育活動そのものの中から理論を導き出すと同時に、その理論を再び教授活動の実際の中で検証する、そのような理論と実践との間の絶えざる相互媒介と申しましょうか、あるいは循環的往復運動と申しましょうか、そういった地道な学問的手法と姿勢こそ、実は京都大学の教育学の伝統であったものに他なりません。明治36年に谷本 富教授によって、文学部哲学科の一角に設けられました講座名が、単なる「教育学」講座ではないのでありまして、「教育学教授法」講座という大変ユニークな名称であったことにも、実践と理論との相互媒介によります「教育」独自のロゴスと方法の探究という、根本的関心と姿勢が反映していると考えております。そうしてみますと、今回の本センターの誕生も、まさしく教育現実への実践的志向という、その伝統に深く根ざした、しかも新たなチャレンジであることが、自ずとご了解いただけるのではなからうかと存じます。

なればこそ、我々は現代人が直面しております人類史的な危機に対して、大学ならではの実践的レスポンスの一つとして、独自の教授システムの研究開発に意を決して取り組みつつあるつもりでおります。先ほど期せずして、基調講演の中で永井先生が概ね次のような趣旨のことに言及されたと記憶しております。今後、我々が「人間として生きてゆくとは、どうゆうことなのか」。本当に人間らしく生きて行くという重大な一点をめぐって、前途に予想されます様々な危機を乗り越えて行くためにも、大学の教師が自分自身の手によって新しい道を拓いていくことが、必須の責務となろうといったご示唆をいただいたと受けとめております。

そのご発言を承りました時いらい、実は私の胸裡でしきりに鳴り響いてやまない言葉がございます。一世紀以上も前のイギリスの特異な思想家トマス・カーライルの言葉ですが、最後にそれをひいて締めくくりとさせていただきますと存じます。「我々の前には、長い長い歴史があった。そして、いま我々が何を為すのかを、後に続く幾多の世代は、息をそろして“ウォッチ”している」。今こそ、この言葉のもつ重い意味に深く思いを致すべきではないかと考えております。

以上で私の発言を終わりますが、本日、遠路はるばるお越し下さり、貴重この上もないご意見をいただきました「日本の知性」を代表する方々に、更めて深く感謝申し上げる次第でございます。今後とも何とぞご支援・ご助勢くださいますように。また、このフロアーにご参集下さいました百を越す多数の方々に対しましても、衷心より厚く御礼申し上げますと共に、今後のお願いも併わせて申し上げまして閉会とさせていただきます。

ありがとうございました。